

(抄録)

研究課題名：屋外遊びと実行機能との関連の検討 -遊びの量的・質的側面に着目して-

研究代表者名：今井（榎本）夏子

幼児期の屋外での自由遊びの機会が減少していることが報告されている。それに伴う心身への影響が懸念されるとともに、屋外遊びを増やす手立てを検討することが急務であるといえる。そのような中、屋外遊びの中でも、不確実性と身体障害のリスクを伴うスリリングでエキサイティング形態の身体的遊びと定義されるリスクプレイが注目されている。しかしながら、リスクプレイに関する研究は、国の内外を問わず希少であるとともに、その多くは質問紙調査で測定したものがほとんどで、自由遊び場面の様子を直接観察できているとは言い難い。また、直接観察法によりリスクプレイを検討した Sandseter & Kleppe (2020) の報告でも、その実態を概観しているに過ぎず、実行機能や社会性との関連を検討したものはない。そこで本研究では、幼児の自由遊び場면을観察し、リスクプレイと実行機能との関連を検討することを目的とした。2021年10月に実施された本研究では、幼児32名を対象とした。実行機能は Strength and Difficulties Questionnaire (SDQ) により測定した。リスクプレイの頻度は、直接観察法により評価した。本研究の結果、非調整モデルでは、子どものリスクプレイと向社会的行動との間に有意な関連がみられなかったものの、性別、親の就労形態、中高強度身体活動を共変量に投入して調整したところ、有意な関連が認められた。一方、リスクプレイと問題行動（多動性、攻撃性）には、共変量で調整しても有意な関連はみられなかった。本研究の結果、性別、親の就労形態、中高強度身体活動を共変量で調整した場合にのみ、リスクプレイと向社会的行動との有意な関連性が確認されることが明らかになった。よって今後は、幼児においてリスクプレイが向社会的行動に与える効果を検討する際には、関連する要因を考慮する必要があることが示唆された。